

新刊紹介

中国 南開大学周恩来研究センター 孔繁豊・紀亜光著
周恩来 鄧穎超研究会訳

『周恩来、池田大作と中日友好』

(白帝社、2006年)

井上比呂子

本書は、すでに出版されている中央文献出版社発行の『周恩来 池田大作と中日友好』の日本語版であり、執筆者は、南開大学周恩来研究センターの孔繁豊所長と紀亜光秘書室長である。前所長の王永祥教授の時代には『周恩来と池田大作』が発刊され、日本では朝日ソノラマから『周恩来と池田大作』という題名で出版されている。(朝日ソノラマ、2002年)。

『周恩来と池田大作』では、日中関係史の中でも、第二次世界大戦後の1949年の中華人民共和国成立から1972年の日中国交正常化までの23年間の歴史を前提として、1974年12月に行なわれた周恩来総理と池田大作氏(以下、池田と記す)の会見とその意義に重きが置かれていた。本書では、二人の歴史的会見を踏まえたうえで、1978年の日中平和友好条約の締結、池田と青年訪中団の10回にわたる中国訪問などに焦点をあて、現代の日中友好関係を築くまでの歴史的経緯について論じている。中日友好に貢献した人物として周、池田それぞれについての人物考察、歴史的考察も加えており、この本は、日本と中国の政治的、社会的背景について言及するだけでなく、二人の人物論としても読むことができる(以下、本書の表現に基づいて、提言や条約、本文の引用以外の部分は「日中」ではなく「中日」という表記に統一する)。

本書は主題として、池田と周恩来の関係、また池田の中日友好に対する貢献について詳しく取り上げている。特に1968年9月に第11回創価学会学生部総会において行われた池田の中日友好に関する提言の意義についても、その時代背景、政治的背景の観点から考察を重ねている。大きく分けると6つの章に分かれており、第1章では周恩来の対日民間外交思想と実践について、2章では池田の民間外交思想とその実践、3章では周恩来、池田大作と日中国交正常化について、4章では中日平和友好条約について述べている。さらに、5章では中日が国交を回復し、友好条約を結んだ後の池田の中国訪問について、特に池田の第7次訪中に焦点をあてて論じており、最後の6章では、周恩来の理念の継承や池田の中日友好への貢献についてまとめている。

1. 周恩来の外交思想

本書では、まず周恩来の外交思想についてふれており、彼を当時の中国における卓越した政治

家であり、外交家であると評している。1949年10月1日の中華人民共和国の成立より、世界の四分の一の人口を占める中国において、周恩来は総理として26年間、命を閉じる瞬間まで、国のために戦い続けた。日本と中国は一衣帯水の間にあるといわれるほど、地理的にも文化的にも交流の長い伝統を持っていたが、19世紀後半に日本が軍国主義への流れを強めたことで、隣国への一連の侵略戦争が起こり、1874年の台湾侵略から第二次世界大戦の終結まで、およそ半世紀の間、日本は中国を侵略し続けた。さらに、蒋介石と吉田政権は、1952年4月に「日蒋条約」を調印し、これが中日関係をさらに悪化させたといわれている。周恩来は其中で、中国の立場を2度にわたった声明で発表している。彼は、「世界の人民を団結させる」という外交政策のためにはまず人民を喚起させ、人民の支持を得て、世論をつくるのが大切だという、民意から政府を動かす「民間先行、以民促官」という対日外交戦略を提起している。彼は実際にこれを身をもって実践しており、1953年7月1日から72年9月23日の中日国交正常化前夜までに、周恩来が日本人と会見、面会した数は287回、323の代表団であった。

また、彼は中日関係改善のために日本の宗教団体である創価学会、またその会長である池田に注目することになる。創価学会は1960年代に会員数を増大し、民主集団として大きな発展を遂げる。松村謙三氏や高碓達之助氏らからこの社会団体の勢力の発展について聞かされていた周恩来は、「このような勢力を排斥し、対立するのではなく、重視し、友人になったほうがよい」とし、創価学会についての調査を始めた。周恩来は創価学会に対する様々な評価が交錯するなかで、創価学会を日本における無視できない大きな勢力の一つと認識し、何らかの方法を通じて創価学会との間にルートを作ることを求めた。また、彼は、創価学会初代牧口常三郎会長が一貫して戦争に反対し、日本の軍国主義政府から弾圧を受けて殉難したという歴史的事実を重視していた。さらなる研究が進み、創価学会は決して軍国主義に傾いた団体ではなく、むしろ民主を基礎として平和を希求する宗教団体であることが明らかになり、彼はできるだけ早く創価学会の幹部と接触を持つよう指示した。その後、趙撲初が来日した折に、創価学会の幹部と接触をしたり、作家の有吉佐和子氏を通じて中国側と創価学会との会見が数度行われた。

2. 池田大作の外交思想

対して、池田の外交思想についてであるが、池田は、国と国との外交関係は、政治と経済の側面に限られるべきではなく、「文化交流」「教育交流」などを通してより発展していくものであるという、民間外交の思想を展開している。池田は、民間外交の観点から中日国交正常化について以下のように述べている——「今、日中国交の扉は開かれた。しかし、政府レベルの国交だけでは、真実の正常化には至らない。大切なことは、友情の橋、信義の橋を架け、民衆の心と心が、固く、強く結ばれることだ。民衆は海だ。民衆交流の海原が開かれてこそ、あらゆる交流の船が行き交うことができる。次は、文化、教育の交流だ。そして、永遠に崩れぬ日中友好の金の橋を築くのだ」(本書59ページ)。このように、池田は、国と国とのつながりも、結局は人間同士の交流、友情と信頼を両国民の間に築くことが非常に大切であると主張し、その論点は周恩来の主張した政府主導ではなく、どこまでも人民を尊重して民間を先行させるという点で、二人の姿勢に

大きな共通点が見出されるとしている。

さらに、池田は文化交流に関しては、一方的な文化的移動ではなく、どこまでも相互性、対等性、かつ全般性を強調すべきであるとし、異なる民族、異なる文化ということについても、それ自体にかけがいのない「価値」を見出していくべきであるとしている。また、教育交流に関しては、「世界の恒久的な平和、民族と民族の協調、国家間の平等互惠、人間が人間らしく生きていける社会の創造は『教育』の基礎の上に行われる」と、国境や民族、言語を越えてのグローバルな交流を可能ならしめるものとして教育や学問を位置づけている。

また、中日の歴史認識に関して、池田は何度も「われわれは歴史を正しく認識する必要がある」と主張している。21世紀に生きる我々にとって、中日の二千年に及ぶ友好交流の歴史と、20世紀前半五十年の日本による中国侵略の歴史、また20世紀後半五十年の両国の敵対関係から友好関係への歴史の経緯は正確に総括し、理解することが必要である。周恩来研究センター所長の孔繁豊所長は、そのような正しい歴史認識・歴史教育によって、両国の青年に崇高な責任感と使命感が生まれ、お互いに信頼し合える人材が育成されることによってのみ、中日友好事業のさらなる発展があると訴えている。

本書では、池田が中日友好のために動いた軌跡を3つの発展段階に分けて論じている。第一段階は、彼が1960年に創価学会会長に就任してから1971年に公明党が訪中するまでの時期で、この間の1968年9月に池田は「日中国交正常化提言」を行い、国交正常化の早期実現を命をかけてアピールした。第二段階は71年に公明党が訪中してから74年5月までであり、公明党が日本の政党を代表して中日国交回復の橋渡しの役割を担っていた時期である。第三段階は、74年5月の第一次訪中を実現してから今日までとなっており、池田は10回にわたる訪中を通して、自らが中日友好の「金の橋」を樹立するために文化・教育交流の観点から活発に尽力したといえる。

3. 池田提言の意義

池田は、1968年9月に第11回創価学会学生部総会において「日中国交正常化提言」を行った。その席上で彼は、中国問題を解決する手順として、以下の三点をあげた。第一は、中華人民共和国を正式に承認し、国交を正常化すること、第二は中国の国連における正当な地位を回復させること、第三に、両国の経済、文化交流を進展させていくことである。中国と付き合うというだけで白眼視されていた当時に、池田は堂々と中日友好を訴えており、時代背景を鑑みるとまさにこれは「命がけの戦い」であったと、ジャーナリストの西園寺一晃氏は述べている。本書でも、この池田提言の行動について、それは「氏の悪に対して何ものをも恐れぬ勇氣、広範な知識、時代を見つめる先見性と判断力、そして、高邁なる使命感、正義感からくるものである」と高く評価している。佐藤政権のもと、反中国政策を強化していた日本において、池田は内外から批判を受けることも恐れず、真っ向から中国問題を取り上げた。この池田提言をもとにして、周恩来は創価学会と親密な関係にある公明党を重視し、国交正常化の実現において公明党は大きな貢献をすることとなった。また本書では、池田が1968年に発表した「日中国交正常化提言」の基本精神と周総理の中日友好への理念は完全に一致していたと述べ、ここでも池田と周は中日友好を希求

していたという点で通じるものがあると強調している。

4. 池田の第7次訪中

周恩来と中日友好について書かれた本は数多くあるが、この本の大きな特徴は、池田の第7次訪中に焦点をあてている点にある。1974年5月の第1次訪中から数えて、池田は合計で10回中国を訪問しているが、中でも1989年に第2次天安門事件が起こり、中国の政情が不安定であった翌年の1990年5月の第7次訪中は非常に意義深いものであったとしている。

池田は、中日民間外交推進に一貫して努力し、計10回の訪中を果たす中で、鄧小平や江沢民とはじめとする中国の歴代の国家指導者と会見し、各地で文化教育交流を進めた。最初の訪中は1974年5月であり、北京、上海、広州、杭州などを訪問した。池田は中日友好協会を訪問したさい、具体的な創価学会と中国との交流計画を提案した。例えば、青年同士、学生同士の交流を行う。中国からの学生、労働者、婦人訪日団の派遣を歓迎する、などである。また、文化・教育交流レベルでは、創価大学に中国の教育関係者を招聘し、講義を行ったり、学生を招くなどの提案を行った。実際に、75年に中華人民共和国建国後初の中国人留学生在が創価大学に来学し、日本で初めての中国の留学生を受け入れる大学となった。その後、池田の努力と中国の各大学との積極的な交流によって、2005年までに創価大学と中国の27の大学で学術協定が結ばれている。そして、第2次訪中の74年12月に周恩来との会見が実現した。

池田の第7次訪中は、1990年5月27日から6月1日にかけて行われた。この時期は、東欧始め社会主義国家の政治的動乱があり、また中国においても89年に第2次天安門事件があるなど、重大な政治事件が起こった。その中で池田はあえて中国訪問を積極的に推進した。氏は7度目の北京大学訪問をし、「教育の道、文化の橋—私の一考察」と題し記念講演を行い、王学珍校務委員会主任等大学首脳との会見を行った。北京大学からは第一号の「教育貢献賞」が授与された。さらに、池田は中国社会科学院を訪問し、団員たちは中華全国婦女連合会、中華全国青年連合会、北京第一実験小学校を訪問している。池田は江沢民総書記や李鵬総理と会見をし、さらに鄧穎超らと8度目の会見をした。

この第7次訪中について、本書では、非凡なる訪中であると強調し、その理由として、訪中の政治的、時代的背景をあげている。中国が経済的にも、政治的にも苦しい時に、池田は「友が苦しんでいる時だからこそ、行って手をさしのべるのである」との信念で訪中を実現している。また、その状況下で中国の首脳が池田及び訪中団を格別の待遇で歓迎した点をあげている。さらに、池田がいくつかの重要な場面で挨拶や講演を行い、これが大きな反響を呼んだことも述べている。その意味で、この第7次訪中が、低迷していた中日友好関係にとって非常に大きな推進力となったことをその後の日本の竹下首相、海部首相、天皇の中国への友好訪問などの歴史的経緯をあげて示している。

終わりに

本書は、池田が周総理との会見以降に推進した中日友好促進への軌跡に主眼が置かれている。彼の中日友好事業に果たした役割と貢献は中国の人々の注目をも集め、現代中国の大学・学術機関から授与された名誉学術称号は70を超える。中日の教育交流としては、池田の大学訪問は第1次訪中の北京大学に始まり、武漢大学、復旦大学、深圳大学、上海大学、香港大学、香港中文大学、マカオ大学の8校にも限り、さらに現在では北京大学、湖南師範大学、中山大学などの14もの大学に、池田思想を研究する研究会・研究所が設立されている。池田と周の大きな共通点は、どこまでも無名の民衆、民衆間の心の交流を大事にし、民間外交を押し進める精神、そして日本と中国の歴史を正しく理解し、それをふまえた上で確固たる信頼と友情を築こうとする中日友好に前向きで真摯な姿勢にあるといえよう。本書の最後で、著者は正しい歴史観を確立することが中日友好の前提と基礎であると結んでいる。このように本書は、池田の果たした功績や周恩来という人物の中国人民への影響について歴史的事実をふまえながら伺い知ることのできる一冊になっている。